# パスカルの『パンセ』草稿第209ページに見られる Carの放棄について

## ――断章「気晴し」（Divertissement）の成立をめぐる秘密の解明に向けて――

湟　野　正　満

**要　旨**

『パンセ』断章「気晴し」のパスカル自筆の草稿第3枚目（R.O. p. 209）に見られる無数の加筆修正については拙論「 パスカルの『パンセ』草稿第209ページ，210ページに見られるテクストの修正・放棄について」[1)]（以下，拙論1と表記）において考察した。そこでは特にピュロス王のエピソードに基づいて書かれた段落の放棄を中心に考察した。そして，この破棄された段落をそれに引き続き綴られている段落と比較することにより，後者は前者を書き直したものであると結論した。

本稿では，拙論1では触れることのできなかったこの2つの文章の間に存在するCar（なぜなら）について明らかにしていきたい。このCarの謎を解明していくと，これまであまり論じられることのなかったパスカルの執筆の方法の一例をかいま見せてくれるばかりでなく，拙論1で導いた結論をより明確に反論の余地のないようなかたちで確定することが出来る。

**キーワード：** パスカル（Pascal），『パンセ』（Pensées），断章「気晴らし」（Divertissement），自筆草稿（manuscrit autographe），複読法（«Double lecture» de M. Yoichi MAEDA）

『パンセ』断章「気晴し」の5枚の草稿には，『パンセ』断章のなかでも特に長く，思想史的にも重要である断章が記されている。しかしこの断章は未だ完全には読み解けていない。その原因の一つに生成論的な解明が充分には行われていないことを，これまで論者はあげてきた。私見によると，5枚の紙の同一草稿上に，三重のテクストの層が重層的に重なっており，それぞれの層に初稿とそれに対する加筆が加えられて，3つの文書が存在している。この成立の複雑さが，これまで，生成論的な研究のメスをこの断章に加えることを拒んできた。

拙論1において，その第1の層に探りを入れ，そこに第1文書の初稿の存在を指摘することが出来た。そこで論じることが出来なかった，ひとたび記され即座に消去された接続詞のCarの意味を追求していくと，第1層に存在する第1のテクストの初稿の存在に，より明白な論拠を与える，否，決定的な証拠を提出することが出来ると思われる。

問題の部分，すなわち『パンセ』の草稿集の第209ページの中央部分上部のテクスト（Texte 14，15）を見てみよう（図1参照）。

問題となる «Car»（なぜなら）は，Texte 15の冒頭文中 «Car　quand on leur reproche que

Texte13

(A) conseiller d auoir une condition toutes heureuse et *la* qu(il)*elle* Jl puisse
*a loisir*
considerer sans y trouuer sujet d affliction, [ C est luy consei ]
^
[ Ce n est donc pas entendre la Nature ]

Aussi les hommes (sen)qui sentent Naturellem$^{t}$ leur condition [ n eui ]

n euitent rien tant que le repos, Jl n y a rien qu Jls ne fassent p$^{r}$ chercher

le trouble, [ ce n est pas qu Jls n ayent Vn Jnstinct [qui les] qui leur ]

[ fait connoistre que la Vraye beatitude ]

Texte14

Ainsi on se prend mal pour les blasmer [mais on a quelque raison en ce que ]

[Les hommes eux ] leur faute n'est pas en ce qu'ils cherchent [(de)le ]

[Diuertissement] [ empesche ] [ Et ] le tumulte s ils ne le cherchoint que comme

Vn diuertissement mais le mal est qu ils [ ne ] le recherchent comme si

La possession Des choses qu'ils recherchent les deuoit rendre veritablement heureux

Et c est en quoy on a raison d accuser leur recherche de uanité de sorte

qu'en tout cela et ceus qui blasment et ceus qui sont blasmes n'entendent

Texte15 *Et Ainsy*

(A) { La Veritable nature de }{ l'homme Car } quand on leur reproche que ce qu Jls

recherchent auec tant d ardeur ne scauroit les satisfaire, s Jls repondroyent comme Jls

deuroyent le faire s Jls y pensoyent bien, qu Jls ne recherchent en cela qu Vne

occupation (J)Violente Et Jmpetueuse qui les detourne de penser a soy Et que c est

p$^{r}$ cela qu Jls se proposent Vn objet attirant qui les charme Et les attire auec
[*Jls ne se* ]
[ uiol ] ardeur, Jls laisseroyent leurs aduersaires sans repartie mais { en }
*Jls ne repondent pas cela parce qu Jls {sont trompez eux mesmes Et qu Jls ont d autres pensees Jls }*
{ croyant comme } { Jls font } { qu Jls seront en suitte dans } { Vn heureux repos } Jls
*{ croyent en effect que ce qu Jls cherchent est capable de les satisfaire Et }*
{ donnent (a)beau a se faire battre mais dans la uerité on ne combat que l objet }
*{ qu Jls }*
[Jls] { *s* Imagin{é}*ent* } [Et non pas leur] [auoir] {Et non pas} {celuy qu Jls ont en effect }

{ Et qui se (s)Cache } { Et se derobe a leur Veüe dans le fond de leur Cœur }

図 1（『パンセ』草稿集 p.209 部分の活字転写[2)]）

ce qu Jls» にある。しかもそれは放棄されている。ここで，この部分のテクストの生成論的説明に簡単に触れておこう[3)]。

パスカルは自分の書くものに幾度も手を入れる人であったし，自身そのことを自覚もしていた。そして，繰り返し加筆修正するのに都合のよい執筆の方法を編み出し順守していた。今とちがい紙が非常に貴重なものであったことも，彼にこのルールを守らせたのであろう。彼が執筆時に守っていたルールは，およそ次のようなものであったという[4)]。

1）はじめて文章を書いていくときには，用紙の左右（場合によってはそのどちらか，ちな

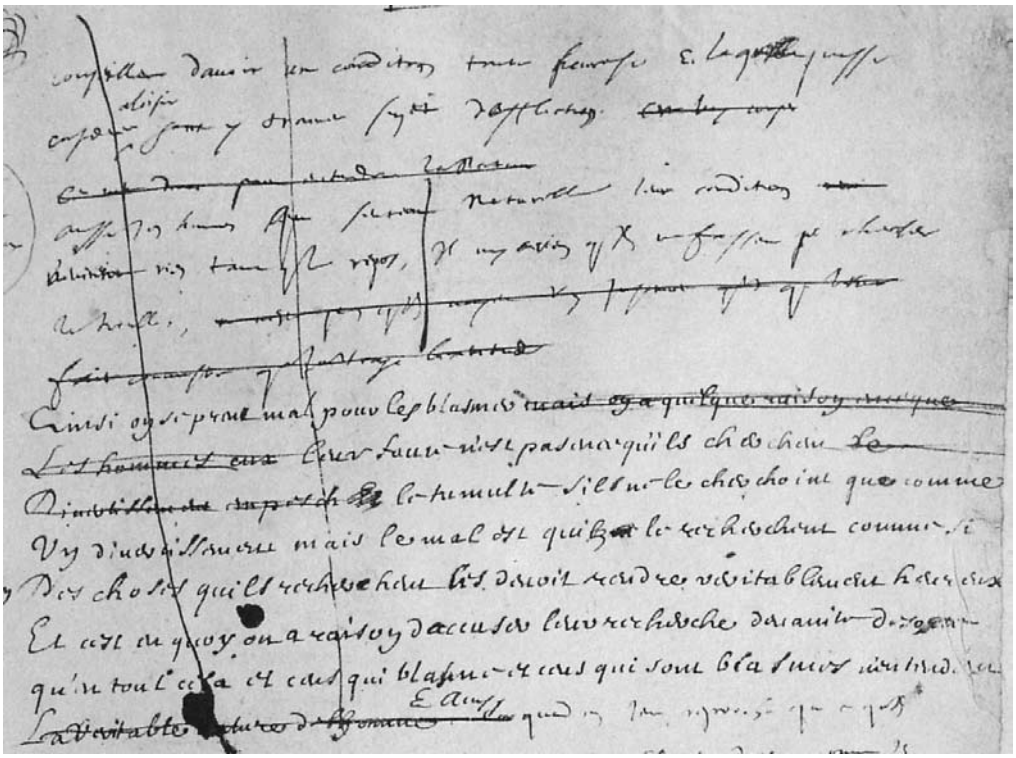
みに断章「気晴し」の草稿では余白は左側のみ）に余白を取り，中央部分に一行おき（ダブルスペース）に書いていき，このときに訂正する場合には，左右の余白や行間を使わずに，行の先に訂正していく。

2）自分の考えていることをひとたびすべて書き終えると，そこですぐに手を入れずにそのまましばらくねかせておいて，はじめに考えていたことが頭を離れてから，ふたたび，取り出して文章に加筆・訂正を加えていく。このときにはじめて行間，左右の余白を使っていく。

他の『パンセ』草稿と同様，断章「気晴し」の草稿でも余白と行間に加筆された文字や文章を無視して，1 行おきに順番に読んでいくと，完全に文法的に整った一連の文章に到達することが出来る。ところで，Texte 14（図 2 参照）は筆跡が異なり，明らかに他人の手によって書かれている。これはパスカル家に仕えていて，文書の作成にあたっていた秘書の筆跡であるという[5]。ところが Texte 14 の直後にある Texte 15 はふたたびパスカル自身の手に戻っている。

この事態はどのように説明できるのか。1 枚目（R.O. p. 139），2 枚目 (R.O. p. 210)，そして 3 枚目の紙に 7 行（Texte 13）書いたところで秘書に Texte 14 を口述筆記させた。

ここまでを書いたパスカルはいったん筆を置いたことを前掲論文において，パスカルの原稿

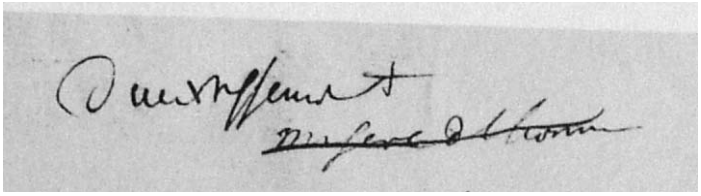


（図 2：R.O. p209 部分，上（Texte 13）はパスカルの，下（Texte 14）は秘書の筆跡）

執筆方法から明らかにした。すなわち，パスカルがはじめに抱いた考えを書ききったことになる。これが第一番目の文章（第１文書）の初稿である。

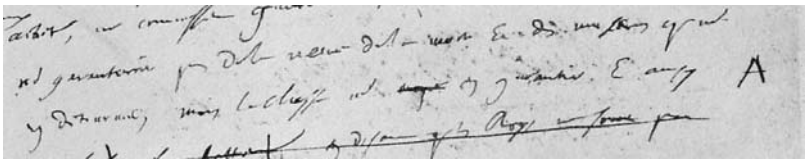
おそらくは，病弱のパスカルは，はじめに考えていたことをもう少しで書き終わろうというところで，疲れてしまい，おそらくはそこに居合わせた秘書に書取りを依頼したのであろう。秘書が急いで書き取っているのもパスカルの体調を気遣ってのことかもしれない。口述筆記された文章はほかにもあり，また特に断章「気晴し」の第４ページ (R.O. p. 217) は，ほぼ第３者の筆跡で覆われており，これらも同じ秘書の手になるという（注５参照)。この断章を執筆していた時期は，おそらく体調がことさら悪かったのであろうか。

また，この第１文書は，パスカルの「私」が，珍しくもテクスト上に現れたケースと考えられ，この文章の特殊性を示している。すなわち，古典主義時代の理念として，作者の生の「私」が文章中に顔を表すことはないのが普通であり，『パンセ』中の文章でも特にめずらしいケースであることは，拙論「表層の「私」と深層の「私」: パスカルにおけるレトリックのもう一つの意味」[6] のなかで説明した。この第１文書は，もともとパスカルが当時企画していたキリスト教『キリスト教弁証論』のために準備していた文章とは別の性格のものであり，パスカルが自分の物覚えのために一気に書き上げたものと思われる。したがって，第１文書には，タイトルの位置にある訂正前の表題である «Misère de l'homme»「人間の悲惨」（図３参照）というパスカルの『キリスト教弁証論』的なタイトルが課せられていたとは考えられない。

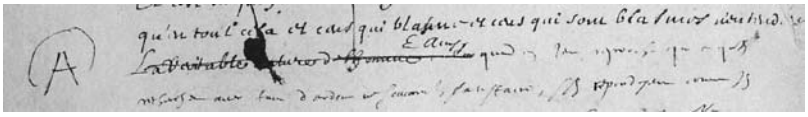


（図３：R.O. p. 139 冒頭）

ところで，Texte 10, 13, 14 は第２層のテクスト（第２文書）成立時に，まっさきに放棄されるのであるが，パスカルはその直前に «Car» と記し，すぐに，直前の語句 «La Veritable nature de l'homme» とともに，横線で放棄する（図２最下行参照)。この語句の放棄に始まって，縦線による一連の放棄が始まる。まず，Texte 14，次いで Texte13 の後半，さらに Texte 13 の全文，その前のページにある続いている文章 Texte10 の最後の２行を縦線で順次放棄する。そして，Texte 9 の最後に «Et Ainsy» と記し，その後に送り記号Ａを付加（図４参照）する。そこでパスカルはこの修正の発端である次ページの横線で放棄された «Car» にもどり，その行の先に受け記号Ａを付加し（図５)，横線で消されている «La Veritable nature de l'homme. Car» の次から Texte 15 以下を記す。記された Texte 15 はいま放棄された一連の文章（Texte 10, 13, 14）を書き換えたものであることは拙論１で明らかにした通りである。



（図４：R.O. p. 210 «Et Ainsy» と送り記号Ａ）



（図５：R.O. p. 209 受け記号Ａと 横線で消されている «La Veritable … Car»）

ところでパスカルは «Car» と書き始めて，それをすぐに放棄してしまったのであるが，いったいどのような理由を説明しようとしたのであろうか，この放棄にどのような意味が隠されているのか，以上が小論のテーマである。

そこで，縦線などで放棄された一連の文章（Texte 10, 13, 14）を「書かれた最初の状態」（premier jet）で引用しよう。

**Texte 10, 13, 14（premier jet，テクストは湟野による）**

Le conseil qu'on donnait à Pyrrhus de vivre en repos qu'il allait chercher par tant de fatigues, recevait bien des difficultés. Dire à un homme qu'il vive en repos, c'est lui dire qu'il vive heureux, c'est lui conseiller d'avoir une condition toutes heureuse et laquelle il puisse considérer sans y trouver sujet d'affliction.

Aussi les hommes qui sentent naturellement leur condition n'évitent rien tant que le repos. Il n'y a rien qu'ils ne fassent pour chercher le trouble.

Ainsi on se prend mal pour les blâmer, leur faute n'est pas en ce qu'ils cherchent le tumulte, s'ils ne le cherchaient que comme un divertissement mais le mal est qu'ils le recherchent comme si la possession des choses qu'ils recherchent les devait rendre véritablement heureux et c'est en quoi on a raison d'accuser leur recherche de vanité de sorte qu'en tout cela et ceux qui blâment et ceux qui sont blâmés n'entendent la véritable nature de l'homme.

パスカルはピリュス王とキネアスのエピソードを引き合いに出す。パスカルの言及だけではわかりにくいので，出典の助けを借りつつ紹介しよう。この話はモンテーニュの「エセー」第 42 巻の最後に見える。ちなみにパスカルは『エセー』の熱心な読者であったことは言うまで

もない。

紀元前三世紀のギリシア西北のエピロスの王ピュロスがイタリア遠征を企てたとき，臣下のキネアスはその計画のむなしさを思い知らせようとして，何のために，こんな大きな計画を企てるのかと問う。「イタリアの支配者になるため」と王は答える。その後はどうなさいますかとキネアス。「ガリアとスペインに侵攻する」と。「その後は」。「アフリカ，そして世界を征服して，ゆっくり休んで心ゆくまで安息に暮らすのだ」。「それをお望みなら，なぜいますぐにゆっくり休んで心ゆくまで安息に暮らさないのですか」とキネアスが忠告している。

パスカルは，このエピソードを紹介したうえで，これは無理な話であると論評する。なぜなら，だれかに安息に暮らしなさいということは，幸福に暮らしなさいとアドバイスすることと同じである。ところがひとは，充分時間をかけてこの状態を考えていると，自然に自分の置かれている状態を感じ取り 心の中に生老病死など悩みの種がふつふつと湧いてきて，なによりも休息を避けようとし，騒ぎを求めるためなら何でもしようとするようになる。

それでは，「なによりも休息を避けようとし，騒ぎを求める」ことのどこに誤りがあるのであろうか。

もし騒ぎを人間の置かれている悲惨な状態から目を逸らせくれるものとしてのみ求めたのであれば，彼らの過ちは，彼らが騒ぎを求めたことそのことのなかにあるのではない。むしろ，自分たちが探し求めているものを手に入れたら，あたかも本当に幸福になれるかのように気晴らしでしかない騒ぎを追い求めていることにある。

このような理由から，これらすべてにおいて騒ぎを求めるひとを批判する人たちも，また，批判されて反論する人たちも，人間の本性をほんとうのところ理解していないのであるとパスカルは結論する。すなわち，この問題の本質をわかっているのは自分であると言い切っているのである。しかも，これが第 1 文書の結句である（注 6 参照）。

パスカルは自分の才能をよく自覚していた。その分，自己顕示欲の抑制にも大変気を使ったことと思われる。パスカルは，Texte 13, 14 の左欄外余白に «La vanité, le plaisir de la montrer aux autres.» と記しているが，これは Texte 13, 14 を再読した時に，自戒の気持ちを込めて自己批判のメモを残したのではないか。

次に，Texte 10, 13, 14 を書き換えた文章である Texte 15 を「書かれた最初の状態」(premier jet）で紹介しよう。premier jet との比較だとこの書き換えが容易にわかるからである。ちなみにこの文章はその後パスカルの手で 2 回の修正を受けることになり，一般的には『パンセ』本文には修正後の文章が載っている。Texte10, 13, 14 を修正後の Texte 15[7] と比較しても，後者が前者からの書き換えだとはわかりにくいからである。

**Texte15（premier jet，テクストは湟野による）**

Quand on leur reproche que ce qu'ils recherchent avec tant d'ardeur ne saurait les satisfaire, s'ils repondraient comme ils devraient le faire s'ils y pensaient bien, qu'ils ne recherchent en cela qu'une occupation violente et impétueuse qui les détourne de penser à soi et que c'est pour cela qu'ils se proposent un objet attirant qui les charme et les attire avec ardeur, ils laisseraient leurs adversaires sans repartie mais en croyant comme ils font qu'ils seront ensuite dans un heureux repos, ils donnent beau a se faire battre mais dans la vérité on ne combat que l'objet imaginé et non pas celui qu'ils ont en effet et qui se cache et se dérobe à leur vue dans le fond de leur cœur.

ここでは，Texte10, 13, 14 に登場したピリュスとキネアスの議論からは離れ，本来の流れに戻る。すなわち，「気を晴らす」という行為をおこなう人々とこれを批判する哲学者を気取る人々との論争という Texte 9 からの路線に戻る。

哲学にかぶれたひとは，人々があんなに熱心にさがし求めているものであっても，それは人々を満足させることができないだろうと言って人々を非難する。そのとき，よく考えて，人々は次のように答えるべきであったとパスカルは言う。自分たちがさがし求めているのは，強烈で激しく熱中できることなのである。 自分たちを魅了し，熱烈に引きよせるような魅惑的なものであれば，それに熱中して，自分自身や自分の宿命について考えないですむのだ。このように答えたならば，彼らの論敵は，反撃の言葉に窮したであろうとパスカルは言う。人々は騒ぎを求めるが，それは自分たちの宿命から目をそらし，人間のおかれている救いがたい状態を忘れるためであると答える。

ところで，人々は実際にはそうは答えない。そのあとで幸福な休息を取ることが出来るのだと人々が答えてしまい，人々は論敵に自分を攻撃させる絶好のチャンスを与えているのである。

ここでパスカルは人々の論敵に批判を向ける。論敵は想像上のものと戦っているにすぎないのであって，人々が現実に自分の中に持っているものと戦ってはいないと。それは，人々の心の奥底に潜み，われわれの視界から見えないように逃れているからであるとパスカルは言う。

このようにして，本能的に人々は騒ぎを求め，人間の宿命を忘れようとするが，他方で，救いがたき宿命の現世であっても幸福を求めようとする人間が浮き彫りにされる。

Texte 15 において，Texte10, 13, 14 では強く感じられた作者の独善的態度がほとんど感じられないほど薄まっている。

そして，Texte 15（premier jet）に引き続き，パスカルは Texte 16 を «Car» と書き始める。この語はここでも，後の補筆の際横線で放棄されてしまうので校定を経た刊本の本文には見ら

れない。ここでも「書かれた最初の状態」（premier jet）で紹介しよう。

**Texte16（premier jet，テクストは湟野による）**

Car, ils ont un instinct secret qui les porte à chercher le divertissement et l'occupation au dehors, qui vient du ressentiment de leurs misères continuelles et ils ont un autre instinct secret qui leur fait connaître que le bonheur n'est que dans le repos et non pas dans le tumulte. Et de ces deux instincts contraires, ils se forme en eux un projet confus qui les porte à tendre au repos par l'agitation, et à se figurer toujours que la satisfaction qu'ils n'ont point, leur arrivera, si après avoir surmonté quelques difficultés qu'ils envisagent, ils peuvent s'ouvrir par là la porte au repos.

本能的に人々は騒ぎを求め，人間の宿命を忘れようとするが，他方で，救いがたき宿命の現世であっても幸福で安息な日々を求めようとする人間の矛盾した行動を，パスカルは原罪以前と以後の人間のあり方によって，すなわち，キリスト教的原理によって説明する。

人々は本能的に騒ぎを求め，人間の宿命を忘れようとする。なぜなら，人間は人間の宿命から逃れられず幸福になることは出来ないので，それを忘れるために本能的に気ばらしや熱中できるものを求めるが，これは原罪以後の人間の本性である。

救いがたき宿命の現世であっても人々は幸福で安息な日々を求めようとする。なぜなら，原罪以前の人間の最初の本性の偉大さのなごりで，それが，幸福は安息のうちにしかなく，騒ぎのなかにはないということを人間に教えているという。そして，これらの相反する二つの本能から，人間は騒ぐことによって安息へと向かうという矛盾した行動をとることになる。もしも彼らが当面するいくつかの困難を乗り越えたのち，そこから安息への扉を開くことができたならば，現在彼らのもっていない満足が，彼らのところにもたらされるだろうと相反する二つの本能が思いこませるのであるとパスカルは説明する。

Texte 16 に至って，この文章の様相は一変するのである。第 1 文書が，騒ぎを求めることによって安息に向かおうとする人間の矛盾した行動を，あくまで人間的事象の中で説明しようとしていたのに，第 2 文書では，Texte 15 で展開した人間の矛盾した行為を，現在の人間の本能と原罪以前の人間の本性という 2 つの矛盾した原理によって説明し，キリスト教的観点が導入されているのである。

草稿上に戻って考えてみよう。

（1）Texte10, 13, 14 のすぐあとに «Car» を書き記す

（2）Texte10, 13, 14 ＋ «Car» を放棄して Texte10, 13, 14 を 15 に書き換える

（3）Texte 15 のあとに «Car» と記してその現象の理由（Texte 16）を説明する

Texte10, 13, 14 と Texte 15 は言葉や例こそ異なるにせよ意図するところは同じである。それであれば，（1）の段階で «Car» と書いてそこに展開しようとした論が Texte 16 の議論であることは疑う余地のないことである。

すなわち，第 1 文書から第 2 文書に改変するために考えついた作業の第 1 番目が実は Texte 16 の付加だったのであるが，改変をさらに効果的にするために，さきに Texte10, 13, 14 を Texte 15 へと書き直すのである。そのことは草稿上でともに放棄されてしまった «Car» がはっきりと証拠立ててくれていると思う。

もう一度言おう。第 2 文書は，まず «Car» と書き始めたのであった。この «Car» は，第 2 文書を作成するにあたって，パスカルが一番始めにしようとしていたことはキリスト教による説明の導入であったことを証言している。論者はこのことが，第 2 文書作成の最大の目的であり，このことによって，この文書が『キリスト教弁証論』のプランに組み入れられた証拠と取りたい[8)]。すなわち私的文書であった第 1 文書を企画中の『キリスト教護教論』のなかに導入しようと思いついて，この大改作に踏み切ったと論者は考えている。そうだとするとこの第 2 文書成立時にはじめてタイトルが付けられ，そのタイトルはパスカルの『キリスト教護教論』のプラン[9)] に存在する「人間の悲惨」である。

これまでの議論で，Texte 15 の冒頭文中 «Car　quand on leur reproche que ce qu Jls» に存在する，書き記してすぐに横線で放棄された «Car»（図 5 参照）について，そこでパスカルは何を説明しようとしたのか明白である。

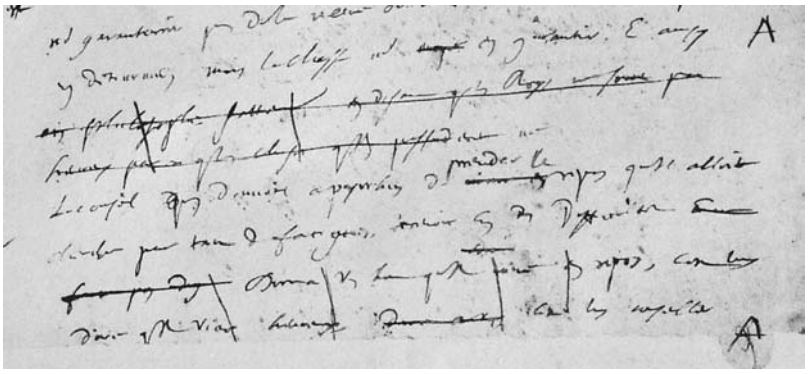
そこで次ぎになぜこのことが，第 1 層に存在する第 1 のテクストの初稿の存在に決定的な証拠を与えることになるのか説明したい。

まず，草稿上での位置関係を再確認すると次の順番に上から並んでいる。

〔~~Texte10, 13, 14〕Car~~ ：〔Texte15〕：~~Car~~〔Texte16〕

パスカルは〔Texte10, 13, 14〕のあとに Car を書き足す時点では，次に〔Texte16〕を書くつもりであった。もちろん字句までも同じとは言わないにしても，少なくとも内容として。ところが，«Car» と書いたところで，〔Texte10, 13, 14〕Car は同時に放棄され，〔Texte10, 13, 14〕は〔Texte15〕へと書き直され，ついで再び «Car» が記され，〔Texte16〕でその理由が説明される。

ここで，テクスト 10 の草稿を見てみよう。



（図６：Texte 10 草稿）

以下に活字転写したものを添える。

**Texte 10**

[ on philosophe sottem[t] en disant que les Roys ne sont pas ]

[ heureux par ce que les Choses qu Jls possedent ne ]

*prendre le*

Le conseil (d)qu on donnoit a pyrrhus de { uiure en } repos qu Jl alloit

chercher par tant de fatigues, receuoit bien des Difficultez [ Et ne ]

{ *soit* }

[ fut pas dig ] Dire à Vn homme qu Jl { uiue } en repos, C est luy

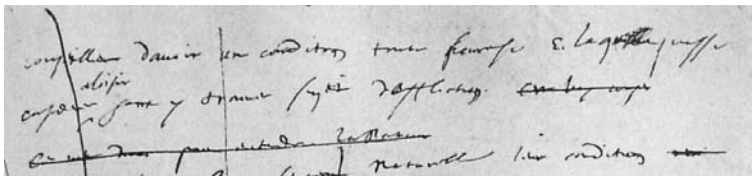
dire qu Jl Viue heureux, [ dire a Vn ] C est luy conseiller

***(A)***

（図７：Texte 10 活字転写）

Texte 10 の３行目の uiure en は横線で放棄され，行間を使って «*prendre le*» と修正されている。５行目には «uiue» が横線で放棄され，行間を使って «*soit*» と修正されている。

次は，Texte 13 前半を見てほしい。写真版と活字転写を添える。



（図８：Texte 13 前半，草稿）

**Texte13**

conseiller d auoir une condition toutes heureuse et *la* qu(il)*elle* Jl puisse

*a loisir*

considerer sans y trouuer sujet d affliction, [ C est luy consei ]

^

[ Ce n est donc pas entendre la Nature ]

（図９：Texte 13 前半，活字転写）

ここでも，行間を使って *«a loisir»* と加筆されている。

何度も加筆訂正を加えることを自覚していたパスカル自身が編み出し，守っていた独自の推敲法の観点から，行間を使って加筆修正するのは，はじめの考えを文章として書き切ってしばらくの間その文章を見ずに置いておいて，はじめの考えに支配されずに自分の書いたものを読めるようになったときに，はじめて余白，行間を使って推敲していったことを考えると Texte10, 13, 14 は書かれてすぐに放棄されたのではなく，書かれてしばらく経って検討の対象になり加筆修正を受けていたことになる。すなわち，これらの行間の修正があるということは，Texte10, 13, 14 は書かれてすぐに放棄されものでないことを物語っている。

まとめてみよう。Texte10, 13, 14 は Texte15 に書き直されたが，Texte10, 13, 14 の修正の方が先である。また，Texte10, 13, 14 の直後に «Car»( なぜなら ) と書き，その理由を述べようとたが，Texte10, 13, 14 を書き直す必要を感じ，Texte10, 13, 14 と «Car» を同時に放棄し，Texte15 への書き直しを先に実行して，その理由を Texte16 として書き継いだ。

ところで，Texte10, 13, 14 は放棄されたが，放棄したテクストを修正することは考えられないので，Texte10, 13, 14 の修正の方が放棄より先である。必然的に，Texte10, 13, 14 と «Car» の書き記された時期には間隔があることになる。Texte10, 13, 14 までの文書と «Car» 以後の文章は成立の時期が異なるのは明らかである。すなわち，少なくとも Texte 1 から始まって，Texte10, 13, 14 までの第一文書と第一文書の後半 1/3 ほどの Texte10, 13, 14 を放棄して Texte15 以下を書き足して作成することになる第 2 文書の 2 つが，草稿上には存在していることが明確に示されるのである[10)]。

## 注

1）拙論 1：「 パスカルの『パンセ』草稿第 209 ページ，210 ページに見られるテクストの修正・放棄について」（京都産業大学論集，人文科学系列第 40 号 2009 年 3 月発行）
なお，小論中で使用するテクスト番号は，拙論 1 で使用したものを共通で使用する。また，『パンセ』草稿の写真版と筆者による活字転写はそちらを参照のこと。

2）*Original des Pensées de Pascal*, Manuscrit 9202（fonds français）de la Bibliothèque Nationale　より。p. 209 の活字転写，写真版は拙論 1 を参照。
本文中の活字転写で使用した記号，書体などについては以下の基準に従っている。

①綴りは現代の正書法に改めず，パスカルの記した綴りを尊重した。現代のものと著しく異なるものであっても，それをいちいち断わることはしなかった。
　例　Le plaisir de le monstrer aux autres
なお，209 ページテクスト 14 に見られる chercheint は，書き取った人物の書き癖。
②大文字，小文字の使用はパスカルのそれに準じた。　例　entendre la Nature
③パスカルが綴りのすべてを書かず，語尾を跳ね上げるなど，いわば略号のようなものを使用する場

合があるが，これは，パスカルの草稿研究の慣例に従って表記した。

例　pour → $p^r$，Nous → $N^s$，語尾の ment → $m^t$ など

④ここでは用紙の大部分を使って 1 行おきにかかれている部分は通常の文字で，これに加筆されているテクストはイタリックで区別した。

このイタリックの文字の行間に更に加筆があるが，これは一回り小さいイタリックの文字で印刷され，区別されている。　例　*grandeur de la nostre premiere*

qui reste de la ^ nature

また，209 ページのテクスト 14 に存在する他人の手で書かれたものは，ゴチック体の活字で区別する。　例　Ainsi on se prend mal pour les blasmer

⑤上下左右の余白にあるテクストは，加筆されたものであり，イタリックで印刷されている。

⑥横線で放棄されている文字については，書いてすぐに放棄されたものはその文字をかぎ括弧［　］で，また時を改めて加筆修正しながら放棄されたものはその文字を中括弧｛｝でくくり区別した。ただしパラグラフ全体を縦線などで放棄しているような場合は，そのまま縦線などで示した。

⑦一度書いた文字の上にそのまま他の文字を重ねて書いた場合，はじめに書いた文字をかっこ（　）に入れ，重ねられている文字をそのあとにスペースを置かずに記した。　例　(de)le

⑧なんらかの理由で筆者が補ったものは〔　〕の括弧でそれを区別している。

⑨活字転写版（Copie figurée）には，本文理解を助けるために反転文字で Texte 15 のように，テクストの番号を付加してある。断るまでもないが，これは筆者が追加したものである。

3）詳しくは拙論 1 を参照。

4）前田陽一著：パスカル註解（1）参照。本文中に掲げたルールは，50 年以上前に前田陽一氏が仮説としてたてたものではあるが，現在に至るまで反証は出てこない。さらに，前田氏はこのパスカルの執筆方法を基準にして，『パンセ』草稿を研究する方法を編み出し，生前その研究成果を公開していた。そのひとつに，ソルボンヌ大学へ招聘された 1 年間に及ぶセミナーの開講がある。20 世紀最大のパスカル全集編纂者でパスカル研究の権威であるジャン・メナール教授は自身の『パンセ』研究に関する主著で 1 項目をたてて 5 ページにわたって紹介し，前田氏のその研究方法に «La Méthode de Double Lecture» と命名している。そのうえ，フランスのクレルモンフェラン大学の国際パスカル研究所では，年に複数回パスカル研究者による『パンセ』草稿研究会を開いており，パスカルのこの執筆方法はすでに定説として，パスカルの草稿研究に広く受け入れられている。筆者もまたこの観点からおおくの『パンセ』草稿を調べ続けてきているが，一つとして反証に出会ってはいない。

5）断章「気晴し」の草稿には 2 箇所パスカル以外の人物の手で書かれている。当時のパスカル家の人々の筆跡に疎い私には，一見それぞれ別の人物の手になるものかと迷ったのだが，幸いにも，上記パスカル全集の編纂者で当時のパスカル関係の人物たちの筆跡を熟知しているジャン・メナール教授をパリに訪ね，断章「気晴し」の草稿に見られるパスカル以外の筆跡について質問する機会を持つことが出来た。教授は調べてくれ数日後，ソルボンヌ大学の研究室で，写真版を前に説明してくれたのだが，結果は，すべてパスカル家の秘書のもので同一人物の手になるものと判定された。氏によれば，一見違って見えるのは，Texte 15 は少し急いで書かれているからだという。

6）「表層の「私」と深層の「私」: パスカルにおけるレトリックのもう一つの意味」（京都産業大学論集．外国語と外国文学系列 13 巻 142-156p）

ここでは，第 1 文書からつぎの 2 つの文章を引用しておこう。

① Quand je m'y suis mis quelquefois à considérer les diverses agitations des hommes et les périls où ils s'exposent dans la cour dans la guerre, j'ai dit souvent que tout le malheur des hommes vient de ne savoir pas viure en repos dans une chambre.

② Quand j'ai pensé plus près et qu'après avoir trouvé la cause de tous nos malheurs, j'ai voulu en découvrir la raison, <u>j'ai trouvé qu'il y en a une, effective</u> qui consiste dans le malheur de notre condition faible et mortelle, et si misérable que rien ne peut nous consoler lorsque nous y pen-

sons de près.

下線部に，発見の喜びが読み取れないだろうか。ここにこの文書 1 を書き出す動機がはっきりと読み取れる。①，②，それに第 1 文書の最後を読み，17 世紀という時代を考え，また，«Le moi est haïssable» と書いたパスカルを知っていれば，これが他人に読ませるためではなく，純粋に自分の発見したことをメモとして残すために書かれた文章と考えられる。

7）Texte 15 の後半は 2 度の修正を受ける。1 度目は行間を使って，2 度目は左余白（Texte 22）を使って徹底的に書き直される。参考までに，以下に，『パンセ』版本に 一般的に登場する修正後のテクストを引用しておく。セリエ版『パンセ』より引用。

A. Et ainsi, quand on leur reproche que ce qu'ils recherchent avec tant d'ardeur ne saurait les satisfaire, s'ils répondaient comme ils devraient le faire s'ils y pensaient bien, qu'ils ne recherchent en cela qu'une occupation violente et impétueuse qui les détourne de penser à soi et que c'est pour cela qu'ils se proposent un objet attirant qui les charme et les attire avec ardeur, ils laisseraient leurs adversaires sans repartie... Mais ils ne répondent pas cela, parce qu'ils ne se connaissent pas eux-mêmes. Ils ne savent pas que ce n'est que la chasse et non pas la prise qu'ils recherchent. Ils s'imaginent que s'ils avaient obtenu cette charge ils se reposeraient ensuite avec plaisir et ne sentent pas la nature insatiable de la cupidité1. Ils croient chercher sincèrement le repos, et ne cherchent en effet que l'agitation.　（ Pascal : Pensées, Edition Classique Garnier, Paris, Bordas, 1991）
「それで，彼らに対して，彼らがこんなに熱心にさがし求めているものも，彼らを満足させることほできないだろうと言って非難した場合に，もしも彼らが，（よく考えれば，そう答えるべきであるように）彼らがここでさがし求めているのは，自分自身について考えることから彼らを遠ざけるような強烈で激しい仕事なのであって，それだからこそ，彼らを魅了し，熱烈に引きよせるような魅惑的な対象を見立てているのであると答えたならば，彼らの敵方は，返す言葉に窮したであろう。ところが，彼らはそうは答えないのである。なぜなら，彼らは自分自身を知っていないからである。彼らは，自分らがさがし求めているのは，狩りだけなのであって，獲物をとらえることではないということをわきまえないのである。彼らは，もしもあの職を得たら，それから先は喜んで休息することだろうと思いこんでいる。そして，彼らの欲望の飽くことのない本性を感知していない。彼らは，本気で安息を求めているものと信じている。ところが実際には，騒ぎしか求めていないのである。」（前田陽一訳）

8）この第 2 文書への改変に伴って，この文書は，はじめてタイトルを持つこととなるという論者の主張の論拠の一つである。

9）パスカルの『キリスト教護教論』のプランについては，一般的にラフュマの提唱した第一，第二写本にみられるものを指す。しかしそれを固定したものと考えるか否かについて，論者は固定したものとはまったく考えてはいない。むしろ，プランそのものも，進化していた。
その論拠は，断章「気晴し」の草稿の成立全過程をみていくと，この断章の生成過程で，2 つの章，すなわち，«Ennui» と «Divertissement» の章が誕生していると言える。この点については改めて筆を執る。

10）第 1 文書について次のような指摘が出来る。。第 2 文書がスタートする時（すなわち Texte10, 13, 14 が放棄される時）には，Texte10, 13, 14 にはすでに修正の手が加えられていた。パスカルが文章を部分的に見直すということは考えにくく，第 1 文書全体を見直す機会を持ったと考えるべきであろう。第 1 文書の Texte10, 13, 14 以外の場所にも，加筆修正の跡が残されている。これらすべてが，第 2 文書成立以前に補筆されたとは言えまい。中にはどの時期に修正されたか推定することの出来る修正もあるが，しかしながら，行間の短い字句の修正については特定できない。しかし，第 2 文書作成以前に Texte10, 13, 14 に加筆修正の手が入っているのだから，第 1 文書を見直し補筆したことは疑うことが出来ない。

## 参考文献

Ⅰ　断章「気晴らし」の自筆の草稿写真集

1）Original des Pensées de Pascal, Fac − Simile du Manuscrit 9202（fonds français）de la Bibliothèque Nationale (Bibliothèque Nationale 作成の Microfilm)

2）Brunschvicg：Original des Pensées de Pascal, Fac − Simile du Manuscrit 9202（fonds français）de la Bibliothèque Nationale［臨川書店の複製版］

3）Couchoud：Discours de la Condition de l'homme

Ⅱ　断章「気晴らし」の写本［いずれも Bibliothèque Nationale 作成の Microfilm］

1）La Première Copie des Pensées, Bibliothèque Nationale, fonds français no.9203

2）La Seconde Copie des Pensées les pièces reliées avec elle, Bibliothèque Nationale, fonds français no.12449

Ⅲ『パンセ』刊本

1）P.　Faugère：Pensées, Fragments et Lettres de Blaise Pascal, Paris, Andrieux, 1844

2）A.　Molinier：Les Pensées de Blaise Pascal, Paris, Alphonse Lemerre, 1877

3）G.　Michaut：Les Pensées de Pascal, Fribourg, Librairie de L'Université, 1896

4）Brunschvicg　：Pensées de Blaise Pascal, Paris, Hachette, 1904

5）Tourneur：Pensées de Blaise Pascal, Edition Paléographique, Paris, Vrin, 1942

6）Tourneur, Anzieu：Blaise Pascal Pensées, Paris Almand Colin, 1960

7）Sellier：Pascal Pensées, (Edition Classique Garnier)Paris, Bordas, 1991

Ⅳ『パンセ』草稿の復読法に関するもの

Yoichi MAEDA, Le premier jet du fragment pascalien sur les deux Infinis, in Études de langue et littérature françaises, No.4 白水社 1964（1965 年　Société des Amis de Montaigne 9 Bulletin1-3 月号に再掲載）

Jean Mesnard, Les Pensées de Pascal , S.E.D.E.S, Paris, 1976

前田陽一『パスカル「パンセ」註解』第 1 巻，岩波書店，1980

# Not a few lines that we find covered with many corrections at the second and third lieves of Pascal's autographe manuscript of the fragment "Divertissment"

Masamitsu HORINO

**Abstract**

At the second and third leaves of Pascal's autograph manuscript of the fragment "Divertissement", we find many lines covered with corrections.

I studied them in my previous article 'The retouches and the lines eliminated at the pages 210 & 209 of the Album of Pascal's handwriting manuscript of "Pensées"'. There, I considered mainly about the abandonnement of an episode about the dialoge between King Pyrrhus and Cineas. I compared the episode with the paragraph written just after it and came to the conclusion that Pascal rewrote the former into the latter.

In this article, I examined the meaning of the word « Car (because) » which was written between the episode and the following paragraph and was also scratched off. When was it written, and why was it scratched off? In quest of these answers, we encouter a very important case of Pascal's rewriting of his ideas in his own way (At the 20th century, through M. Yoichi Maeda's studies, we began to know that Pascal wrote his ideas in his own way, in the way he firmely kept ). We can also see here that the previous conclusion of my previous thesis has been proved as incontestable.

**Keywords:** Pascal, "Pensées", "Divertissement, "autograph manuscript", "Double lecture" of M. Yoichi MAEDA (named by Pr. Jean Mesnard)